

3. 評価と価値区分

釣川水系に生息する（これまでに記載されているもの）魚種のうち絶滅が危惧されているものとしてニッポンバラタナゴ、ドジョウ、ウナギ、メダカがあげられる。メダカについては別項でまとめたので、残り3種についてみた場合、ドジョウ、ウナギは今回確認されていないので、評価区分について保留する。ニッポンバラタナゴについては、価値区分BもしくはCにあるものとして、出現場所、山田川（No65）を中心とした区域、田久橋を中心とした区域は保全すべき対象となる。この両地区は、1990年代はじめまではバラタナゴの宝庫で、圃場整備の進行とともに急速に激減していった場所でもある。また今回の調査により産卵に必要な淡水産二枚貝の生息の回復があり、底質が砂礫底で、水辺植物、抽水植物が繁茂して生息条件が良好な場所である。

評価区分Dとして、宗像で唯一河川の上流部、といっても最下部であるが、タカハ

ヤの生息する大穂川の上流部、激減しているモツゴの確認場所である宮川の上流部、2型の存在の可能性があるヨシノボリの生息する綿打川及び名残川上流部があげられる。

以上にあえて加えるなら、人為的影響が最も強く本流の上流部からの流れと最大の支流である朝町川のそれが合流し水量が一段と増え、水生動物も交じり合う東郷橋近辺は、田園都市の河川のモデルともなり得る場所として保全対象にしてもよいのではなかろうか。また、釣川の最下流部で合流する釣川水系の大きさからいうと第3の支流である樽見川は、海に近く、上流部に豊富な底生動物相を持ち、周辺にはメダカの大集団が生息しており、今後更に調査してみる必要がある河川である。

以上の重要な地域を図9-10に示す。